

金持ちと鶏

小川未明

青空文庫

あるところに金持ちかねもちがありまして、毎日退屈まいにちたいくつなものですから、鶏にわとりでも飼かつて、新鮮しんせんな卵たまごを産うまして食べようと思おもいました。鳥屋とりやへいって、よく卵たまごを産うむ鶏にわとりを欲ほしいのだが、あるか、と聞ききました。

鳥屋とりやの主人しゅじんは、

「よく卵たまごを産うむ鶏にわとりなら、そこのかごの中なかに入はいつていますのより、たくさん産うむ鶏にわとりはありません。」といいました。

金持ちかねもちは、かごの中なかに入はいつている鶏にわとりを見みました。それは、背せの低いひく、ごま色ごまいろの二羽ふたわの雌めんどり鶏どりと、一羽ひとわのあまり品ひんのよくない雄おんど鶏どりでありました。

「これがそんなに卵を産むのか。」と、金持ちは問い返しました。「産むにも、それほど産む鶏は、おそらくありません。」と、鳥屋の主人は答えました。

金持ちは、その三羽の鶏を買って家に帰りました。

なるほど、日数がたつにつれて、雌鳥は毎日卵を産みはじ

めました。一日とて休みなく産んだのであります。金持ちは、毎

日新鮮な卵を食べられるので喜びました。

「買う時分には高いと思つたが、こう、毎日卵を産むんでは、

ほんとうに安いものであつた。こんないい鶏というものは、めつ

たにあるもんでない。」と、独りで自慢をしていました。

ある日のことでありました。金持ちの友だちが遊びにきました。

金持ちかねもちは友だちともに向かむつて、

「家の鶏とりは、ほんとうに珍めづらしい鶏とりで、毎まい日にちいい卵たまごを産うむ。まあ、

あんな鶏とりはめつたにないものだ。」と、自分じぶんの鶏とりをたいそうほめていいました。

友だちともは、日ひごろから、やはり鶏とりが好すきであつたものですから、

「ほう、おまえさんも、このごろは鶏とりを飼かいはじめなさつたか。

どれ、どれ、どんな鶏とりだかひとつ見みせてもらおう。」といつて、さつそく、裏うらに出でて、その鳥とりをながめました。

金持ちかねもちは、そのそばにやつてきて、

「どうだい、珍めづらしい鶏とりだろう。」といいました。

友だちともは、黙だまつて、その鶏とりを見みていましたが、やがて大おおきな口くち

を開けて笑い出しました。

「おまえさんは、まだ鶏にはまったくの盲目じゃ、この鶏などは、さらに世間にある鶏で、珍しい鶏でもなんでもない。」といいました。

それから、友だちは、自分の養鶏によつて経験をした、いろいろなことを語つて金持ちに聞かせましたので、金持ちは、自慢したのが恥ずかしくなりました。

友だちが、帰りました後で、金持ちは、なんだか悔しくてなりませんでした。日ごろから負けずぎらいな男でありましたから、どうかして、そのうち友だちを驚かしてやりたいものだと思ひました。

いままでのように、金持ちは、卵を産む鶏をたいせつにしなくなりしました。どうかして、こんなありふれた鶏をどこかへやって、珍しい鶏をほしいものだと思ひました。

ある日のこと、金持ちはふたたび町の鳥屋にやってきました。

「鳥屋さん、どうか私に珍しい鶏を売ってくれないか。この前、

この店で買って帰った鶏はありふれた鶏で、珍しくもな

い。」といひました。

すると、鳥屋の主人は、

「この前いらしたときには、卵をたくさん産む鶏が欲しいとの仰

せでしたから、卵を産む鶏をさしあげたのです。いかがですか、

卵を産みましたか。」と聞きました。すると、金持ちは顔をしか

めて、

「産むにもなんにも、毎日うるさいほど産む。卵ばかり食つて
いられるもんでなし。」と、かえつて不平をいいましたので、さ
すがの鳥屋の主人もたまげてしまいました。

「よろしゅうございます。その金網を張ったかごの中にいる
鶏は珍しい鶏です。おそらく、こんな鶏をこの近在に持つてい
る人はありません。強いことはこのうえなしです。かごから外に
出すときは、脚になわをつけておかないと、空を飛んで、逃げて
ゆきます。これは対馬からきましたので、野生の鶏でございます

。」といいました。

金持ちは話を聞いただけで、はやびつくりしました。そして、

金網かなあみを張はつたかごの中なかをのぞきますと、なるほど、首くびの長ながくて赤あかい、背せの高たかい、けづめの鋭すどくどがった雄おんどり鶏どりと、一羽わのそれよりりやや体からだの小ちいさい雌めんどり鶏どりがいました。

「鳥屋とりやさん、ほんとうに珍めずらしい鶏どりだね。」と、金持かねもちは喜よろこびに喜よろこびながら問といました。友だちともに見みせて、ひとつ驚おどろかしてやろうと思おもつたからです。

「へい、へい、お珍めずらしいということにかけては、どこへ出だしたつて恥はずかしいことはありません。」と、鳥屋とりやの主人しゅじんは答こたえました。

金持かねもちは、この鶏とりをかごごと買かつて帰かえりました。明あくる日ひ、さつそく、友だちとものもとへ使つかいをやって、世よに珍めずらしい鶏とりを手てに入れ

たから、ぜひ、見みにきてくれと告つげました。

鶏とり好きの友ともだちは、どんな鶏とりを金持かねもちが買かつたろうと思おもつて、

すぐにやつてきました。

「珍めづらしい鶏とりをお求もとめなさつたというが、どれひとつ見みせていただ

こう。」と、友ともだちは、金網かなあみを張はつたかこの前まえに立たつて、内うちを

のぞきました。

「なるほど、変かわつた鶏とりだな。」と、感嘆かんとんをしてながめていま

した。

そばに立たつていた金持かねもちは、得意とくいの顔かおつきをして鼻はなをうごめか

していました。

「この鶏とりは、空そらを飛とぶばかりでなく、強つよくてどんな鶏とりにもけつし

て負けたことがない。」と、金持ちがいいました。

友だちは、金持ちの顔を見上げて、

「空を飛ぶとな、そんな鶏が世の中なかにありますかえ、それはすこしおおげさすぎはしないか。」と、頭かしらをかしげました。

「だれがうそをいうもんか。ひとつ飛ばしてみせよう。」

と、金持ちはいつて、大騒おおさわぎをして、鶏とりの脚あしに繩なわを結むすび付けて、外そとに出だして放はなしました。

すると、たちまち羽はばたきをして、鶏とりは屋根やねの上うえを飛とび、木きの枝えだに止とまりました。

友ともだちは、これを見みて呆あっけ気けにとられると、金持かねもちはますます得意こゝろになつて、

「このとおりだ。闘鶏とうけいをさせるなら、どこからでも相手あいてになるのを連れてくるがいい、けっして、この鶏とりは負けまないから。」
と、金持ちかねもはいいました。

友ともだちは、考かんがえていましたが、

「じつは、私わたしのところつよに強い闘鶏とうけいが一羽わいる。かつて負まけたことがないのだから、ひとつおまえさんのこの鶏とりと闘たたかわしてみましよう。」

といいました。

「それはおもしろいことだ。」と、金持ちかねもは答こたえました。

明あくる日ひ、友ともだちは闘鶏とうけいをつれてきました。そして、金持ちかねもの鶏とりと闘たたかわしました。

はじめのうちにはどちらが勝つか、負けるかわからないほどでありましたが、ついに金持ちの鶏に友だちの闘鶏は負かされて、血だらけになつてたおれてしまいました。

それからというもの、金持ちの得意は一通りでありませんでした。近所でも、この鶏は評判になりました。

小学校の生徒や、小さな犬は、この鶏をおそれてそばに寄りつきませんでした。

金持ちは、鶏が家に慣れると、つねにかごから外に放しておきました。夜になると鶏は、家に帰つてきてかごの中に入りました。近所の人々は、鶏のために圃や、庭を荒らされるのを苦に思いましたけれど、家や、地所が金持ちの所有であるために、

なにもいわずに忍んでいました。

秋の日のこと、この村を洋服を着て、銃を肩にした男が、猟犬をつれて通りました。日ごろ怖ろしいもの知らずの金持ちの鶏は、犬に向かって不意に飛びつきましたので、犬は怒りました。そうして、とうとう犬のためにかみ殺されてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「いづも雑誌」

1919（大正8）年10月

※表題は底本では、「金持《かねも》ちと鶏《にわとり》」となっています。

※初出時の表題は「金持と鶏」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金持ちと鶏

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>